永遠に、平和への願い

中野綾子（田喜野井・68歳）

「グーン、グーン」澄み切った青空に銀翼を輝かせ、憧れの海外旅行客らを乗せて居るであろう旅客機が通り過ぎて行った。この爆音に似た音を遠い昔に耳にした事がある。四十余年前「グゥーン！」圧し潰されそうな重圧感、それは戦時中日本を襲ったB29の爆音の響きだ。今もこんな爆音をきくと、ふと当時を思い出す事がある。老父母のもと家事手伝いをして居た私に、千葉防空監視隊本部より徴用があり、昭和十八年十月それ迄の男子に代って女子防空監視隊本部員として県より任命を受けた。一組八名が三組で一班を編み、三班が一昼夜交替の任務、それに男性の隊長、副隊長三名で編成されていた。隊員は十八才から二十三才位の独身女性、私は当時二十一才でした。紺サージの上着に胸章とプロペラのバッチを付け、下はズボンの制服を着用し、靴は軍靴に似たベージュ色の革靴で、当時としてはスマートなものでした。任務の内容は、見晴らしの良い高台に建てられた監視哨に青年が立ち望遠鏡で、「敵、味方」の飛行機を見張り、その飛行状況を、「侵入方向、機数、敵か味方か、機種、飛行高度、進行方向、風向風速、」の報告を各所の監視哨から本部に直通電話で送り、これを受けた本部監視隊員は、東部軍司令部へ直通電話で報告するのが任務であった。すると間も無くラジオから、「東部軍司令部発表」となり「警戒警報」、「空襲警報」となって流れたのである。この情報送りの外、「一汁一菜」の夕食作り、御飯は炒り大豆入り、「蜀黍入り」一見赤飯のよう、「玉蜀黍入り」炒り卵をまぜた様で両方とも美味しそうであったが、とても喉を通るものではなかった。夜食に藁入の様なゴソゴソとした黒い食パンが一切れと、大匙一パイ程の白砂糖が出された。この砂糖を半分、或は全部を甘党の母に持ち帰り喜ぶ顔を見ては親孝行をしたと感づるほど物資は窮乏していた。この様な中、楽しいひと時もあった。それは控の番の時間で、控室で編物や、睡眠したり、雑談に花を咲かせた。その花は、日本が大勝利して、この女子防空監視隊の制服で堂々の「アメリカ本土上陸大行進！」であった。どでかい夢であったがそれを信じて乙女達は、「欲しがりません、勝までは」と空襲下のなか總てに戦った。或る時は防空演習の水運びバケツリレーや、竹槍りの訓練もした。戦地で実戦体験のある隊長は「こんな事したって防げるものではない、戦争なんてこんな甘いもんじゃない」と、小さな声ではき捨てるように云ったのを、私は聞いてしまった。「何故？」隊長の立場にありながらこんな言葉を口にするのだろう？憤りを感じたが、ふと、私も一瞬「そうかも」との思いが走ったが、激しく首を振りその思いを払った。

こうした中、第一線の銃後の守りの誇りをもって若者らしく任務に着いていた。その後増々B29、艦載機等の攻撃が激しく、東部軍司令部発表が

間に合わぬ程になってきた。昭和二十年三月十日に東京大空襲があり、任務あけの帰宅途中京成千葉駅で親戚、知人を頼って来た罹災者の家族数人と逢った。いづれも憔悴しきった姿であった。その方に、「大丈夫ですか」「どうでした?」と声をかけたところ、空襲で河の水も熱くなりその中に死体が折り重なって浮いていたり、又道路にもごろごろ横たわっていた。その上を乗り越え、上を見れば垂れ下がった電線には片腕がぶら下がり、この世とは思えぬ地獄絵の中を逃げて来たと。背中や両手に焼け残った鍋や釜や大きな袋等を持ち煤けた顔と、落ち着かぬ目で話してくれました。

そして千葉市も七月七日、B29の大編隊の大空襲となった。市街地や軍隊を襲い我が家から四キロ程の高射砲隊と防空学校を狙った爆弾や焼夷弾が私の頭上を降って通り抜けて行った。翌日引き潮の海の中に不発弾がズブズブ刺っているのを見て思わず身震をしてしまった。私は非番で防空頭布にモンペ姿で非常袋を背負い、水を入れた一升びんと何故か洋傘まで持ち、落ち着きなく防空壕にも入っておられず周りをうろうろし、喉は乾きひっつき、一升瓶を持つ意味がその時本当に分った。時々炸裂する焼夷弾の光りの明るさで照らし出された姿は今、思い出すと滑稽で笑ってしまう程、平和な日本となりました。中心市街はほとんど爆撃を受け、米軍は、占領後使える建物は避けたと後で聞いたが成程、県庁、市役所、警察署(すぐ隣りの署の寮は焼けた)、そして東洋一を誇った(黒々迷彩をほどこしてあった)千葉医大等は残った。的確な爆撃に脅威を感じた。当然ながら一班隊員二十四名中、郊外地の私達五名以外は皆被災者となった。その人達も逞しく焼け後に一時しのぎの家を建てたり、近くの親戚へ一時避難した人達も、銃後の守りの任務を全うするように成り、手うすであった班員も満たされたが、被災者同志がまとまり、私達が同情の言葉をかけても、「被災しない人たちには私達の苦労なんか分らない」と云われたりして、グループが二つになってしまったようにチグハグになり、何となく隙間風が吹き団結しにくくなって参りました。この時以来経験しない事は「あなたのこと分かるわ」などと軽がるしく云えない経験をしました。親友のTさん家族も被災し、退役軍人である老父母、病弱な妹と恩給で静かに暮らしをして居ましたが、被災後、トラックの車庫の奥の一間を借り、親子四人が膝つき合せる様な、天から地への急転の生活となりました。訪ねた時、「何も無くて」と云いながら疎開して残ったと云う黒のうるし塗りの菓子皿にのせて出された手作りのさつま芋の黄色い茶布しぼりは今も鮮明に、その人柄と共に残っており、和、洋菓子も豊富になった現在でも絶対に味わえないと思うほどの美味しさでした。その他、被災により親戚に身を寄せてたがうまくいかず、お互いに肉親故の甘えからか骨肉の争の仲になってしまった人等々。我が家も父が永年続けていた楽しみの晩酌もとうとう不自由となった上、一家をささえる責任は重く、その上空襲は激しくなるし、祖父は「何時死んでも生命は惜しくない」と頑固に壕にも入らず、食料難にもかかわらず食事に対しても我儘で子供より困る始末で父の苦労は大変であったのであろう。気も荒々しくなり不隠な日々にも有る様に成ってきた。

こうした中、間も無く迎えた「八月十五日」正午、天皇の玉音放送があるとの予告に、「国民総突撃を!」との御言葉と思い体を堅くして今や遅しと、皆でラジオを囲み耳をかたむけた。「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」云々、「終戦宣言」であった。途端に体がぐったりとくずれ「そんな事ない!」「うそだ!」と思わず叫んでしまった。ふと、横の母を見ると、信じられなそう乍らもホッとした安堵がしわだらけの顔に走った。

度々の空襲と、食料難等はよる年波もあってさすがの我慢強い母も疲れ切って居たのであろう。が、それを見た私は何故かムラムラッ、と何かがこみ上げてきた。「弱虫」「意久地なし！」、これから先、母親と私達若者とは進む道が違うのではないか、この戦争は百年戦争とも聞いたことがある。「私は未だまだ闘うぞ！、アメリカなんかに負けやしない！」訳の分からない興奮であった。この夜はさすがにあのけたたましい空襲警報のサイレンの音もなく灯火管制用の黒い幕を恐わごわはずした電燈がまぶしく部屋中を明るく照らして居た。

こうした軍国主義に育てられた私の青春も終った。いま、むなしく終った私の青春も「国連平和賞」「人道賞」等、平和に貢献で多数の受賞をされている「SGI会長池田大作先生」を師と仰ぎ、「生涯青春」の歓喜（よろこび）の日々である。

「日の丸の翼よ！何時の日に」と、嘆いた日も遠く、あの日から思えば嘘のように、今日も澄みきった大空の中、旅客機が軽ろやかに爆音を残して飛び去って行った。「平和の象徴のように――」機影を追いつつ「永遠の平和」を祈った。

